

平成 30 年度学校防災教育実践モデル地域研究事業の取組

愛南町教育委員会

1 研究の目的

- 発災時・避難時・避難後に分け、自分の取るべき行動を学ぶとともに、危機予測・回避能力を身に付け、個人として地域として生き抜くために主体的に行動する態度を育成する。
- 拠点校を中心とした教職員の防災教育力を向上させるとともに、地区住民との連携をとり、地域と一体となった安全推進体制の構築を進め、防災意識を高める。

2 取組の内容

(1) 4月23日 防災マニュアルの見直し・整備

様々な災害・事故に的確に対処するため、毎年度当初に全教職員の話し合いのもと、内容を改定している。今年度は、「被災時の児童引き渡し」の手順と「安否確認の方法」について見直しをした。また、地域と連携して作成した防災マップをもとに、地震・津波発災後の避難経路を見直し、各避難場所に行くための複数経路を掲載した。

(2) 7月26日・8月22日・9月20日 実践委員会

別紙 17 名の実践委員会メンバーにより以下のような内容で実施した。

第1回：事業内容の概略説明と年間事業計画の検討（7月）

第2回：防災教育に関する実践的取組の中間発表（8月）

第3回：講演会「西日本豪雨災害から学ぶ」（9月）

第4回：事後報告及び最終検証（12月）



(3) 避難訓練

ア 5月14日～3月12日（毎月1回） 地震・津波想定

地震・津波を想定し、毎月1回のペースで避難訓練を実施してきた。第1回目の避難経路確認から始まり、それまでの反省をもとに実施方法や内容を少しずつ変えている。状況を判断する力、危険を予測する力等全ては「自分の命は自分で守る」力につながると考え、実践を繰り返している。各避難訓練における変更点は以下の通りである。

- | | |
|---------|-------------------------|
| ①避難元の教室 | ②第一避難場所で点呼をとらず直接第二避難場所へ |
| ③教職員の役割 | ④児童に告知せず（抜き打ち） など |



イ 12月7日 火災想定

12月、空気が乾燥し、火災が発生する危険性の増す時期を控えて、火災を想定した避難訓練を実施した。全校児童を対象に、水消火器を使つての消火訓練も実施した。



ウ 10月4日 起震車体験

津波から逃げる訓練は重ねているが、まずは地震から身を守ることが肝心である。愛南町防災対策課に協力していただき起震車体験を実施した。震度7の揺れでは、全く動くことができず、もしもの時の現実をシミュレーションすることができた。



(4) 7月10日 救命救急法講習会

夏休みのプール解放を控え、保護者・教職員を対象とした救命救急法講習会を実施した。愛南町消防署の方を講師として、心肺蘇生法やAEDの操作方法等の実習を行った。



(5) 7月31日・8月5日・8月22日 防災ワークショップ

児童、教職員はもちろん、保護者、家串小学校区全ての地域住民の皆さんにも参加していただき、消防防災科学センター防災図上訓練指導員の毛利氏を講師として迎え、防災ワークショップを3回実施した。

第1回 「南海トラフ大地震発生時における内海地域の被害予想と避難の現実」

第2回 発災後予想される地域孤立について、その対応策を考える。

第3回 第2回ワークショップにおける各班の考えを発表し合い検証をした。



(6) 8月17日～8月19日 被災地域視察研修

実践委員3名で、東日本大震災の被災地（仙台、気仙沼、南三陸、石巻）の視察研修を行った。忘れないためにあえて残された被災建造物、町ごと移転をした高台の集落、延々と続く防潮堤、津波に押し流され町が消失した地区、そして未だに工事が続く復興道路、そのすべてが、今後の防災教育について何をすべきかを語りかけてきた。

また、気仙沼市役所では、被災から復興までの道のりを詳しく聞かせていただいた。



(7) 8月22日 防災一日キャンプ

保護者、教職員はもちろん、地域住民も参加して防災一日キャンプを実施した。愛南町防災対策課に協力していただき、アルファ米等の非常食を試食した後は、消防防災科学センターの毛利氏を講師に迎え、避難所運営ゲーム（HUG）を体験した。



(8) 8月28日 実践委員・教職員防災教育研修会

愛媛大学森脇教授を講師に迎え、発災後の避難の実際と避難所での生活やその運営について、研修会を実施した。次に、避難所がない内海地域では、津波被害を受けないと予想される数少ない倉庫や使用されていない建物を、いざというときの地区の共有財産として使用できるように話し合いをしておく必要性などを教えていただいた。最後に、避難所の運営は決して行政任せにするのではなく、それぞれが役割を持ち、共助の精神で立ち向かっていかなくてはならないことを確認した。



(9) 8月中旬 防災マップ資料収集・作成

防災マップの作成も今年度で3年目となった。1年目は「各地区の避難場所」、2年目は「避難場所から避難所へ」をテーマとしたが、今年度は「避難経路を複数考える」をテーマに作成している。担当児童は教職員と共に夏季休業などを利用して、各地区に分かれて現地を踏査、地域住民や地元消防団の協力・支援を得ながら複数の避難経路を調査した。



(各地区別防災マップ)



家串地区



平濤地区



火打地区



油袋地区



魚神山地区



荒檜地区



上記の各地区防災マップを集めた家串地区総合防災マップは、「第15回ばうさい探検隊マップコンクール」において、「文部科学大臣賞」を受賞した。

(10) 7月11日・11月20日 地域のお年寄りとの交流

防災教育を進めていく中で児童が持った思いの一つが、「お年寄りは、自分たちのように素早く動けないかもしれない。でも、決してあきらめてほしくない。地域みんなで避難したい。」であった。児童はまず、地元老人クラブと連絡を取り、交流会からスタートした。プレゼント交換や、歌の贈り物などをした後、大判の地図を広げ、各お年寄りの居所を確認し合った。2回目の交流会では、お年寄り一人一人に、ミニ防災マップと近くの避難場所の簡単な説明書を配付し、避難経路や避難場所の備品等を確認していただいた。



(11) 10月12日 地域避難サポーターの確立

本事業の協力校である家串保育所は、家串小学校同様海岸沿いにある上、一段と避難場所から遠い。保育所には幼い園児が多数おり、避難に時間がかかる恐れがある。そこで、5・6年生が中心となって、保育所に隣接する愛南町の海洋資源センターにお願いし、避難サポーターになっていただいた。地区内郵便局長にも同依頼をし、承諾していただいた。



(12) 10月23日 防災参観日・防災学習発表・防災教育講演会

ア 授業公開



【1・2年 じしんからのちをまもろう】



【3年 ひなんの仕方を考えよう】



【4年 みんなの役に立つ喜び】

防災教育に視点を当てた授業を3学級で公開した。1・2年生は、学級活動で、学校以外の場所にいる時の避難行動について話し合い、その後の家族での防災会議につなげた。3年生は、同じく学級活動において避難時に防災袋の中に準備しておくべき物について話し合った。各家庭で準備しているものに違いがあり、何が必要かどこに置くべきかなど、具体的な話し合いになった。4年生は道徳科で避難所での生活について、資料をもとに考えを出し合った。東日本大震災後、避難所の小学生たちが自主発行した「ファイト新聞」を見て、共助の必要性を感じ取った。

イ 防災学習発表

5・6年生が、総合的な学習の時間を中心に学んできたことを発表した。避難場所までの経路や自宅からの時間、避難後の生活、避難場所までの複数経路の確認など、これまでの学習を通して得た知識や思い、それらをまとめた各地区の防災マップやその作成過程を発表し、地域への発信も同時に行うことを通して、児童はもちろん、保護者や地域住民の防災意識向上を目指した。



ウ 防災教育講演会

愛媛大学森脇教授（愛媛大学防災情報研究センター長）を講師に迎え、「住民が連携した実践的な防災力向上の必要性」と題して講演会を実施した。7月の西日本豪雨災害の被害状況や避難の実際等も交えながら、いざという時に備える「危機管理」、事前に備える「事前減災」、そして地域で備える「自立連携」を中心に話をいただいた。



(13) 11月7日 魚神山ふるさと学習会

魚神山地区において公民館や旧魚神山小学校（現在廃校）の校舎を利用し、ふるさと学習会を実施した。まず魚神山小学校の校歌や町音楽発表に向けて練習中の歌を披露した後、防災教育に関する学びを5・6年生が発表し、児童が作成した防災マップを利用しながら地域住民と合同の避難訓練を実施し、防災意識を共有した。



(14) 11月28日 校区別人権・同和教育懇談会

人権・同和教育視点の授業公開、人権標語の発表に続いて、大洲高校繁樹先生による人権コンサートを実施した。「防災教育＝人権教育」というテーマで「人が幸せになる」「命を大切にする」「無関心を排除する」という3つの誓いを教えていただいた。東北の震災で家族を亡くした人の実話も織り交ぜながら、歌とともにメッセージを届けていただいた。



(15) 12月16日 家串地区合同避難訓練・防災教育講演会

ア 家串地区合同避難訓練



学校運営協議会、PTA役員会での話し合い、また児童作成の防災マップなど様々な事前準備を経て、家串地区合同避難訓練を実施した。あいにく小雨が降り始めたが、事前の交流会をきっかけに参加を決めていたお年寄りの姿が見えるなど、多くの地区住民も参加した。児童の「津波が来ます。早く逃げてください。」「みんな一緒に逃げましょう。」の声が地区全体に響き渡る中、共助の大切さを感じ取ることができた。

イ 防災教育講演会

合同避難訓練後、参加者が家串公民館に集まり、愛媛大学森脇教授を講師に迎え、災害への備えを中心に講演会を実施した。災害を乗り越えていくための基本的な考え方「寄り添い支え合う」「一人の100歩より100人の一歩」「何ができるか今から考える」を、西日本豪雨災害や北海道胆振東部地震などの実例を交えて教えていただいた。避難の主体は住民であり、我々住民一人一人が何かの役割を果たせるはずであるという共助や被災後のまちづくりも含めた事前の準備が必要であることを、改めて確認することができた。



(16) 6月24日 避難路整備

家串小学校の敷地に隣接する山の津波避難場所の整備を、保護者、教職員、地域合同で実施した。草刈りはもちろん、地震で倒れそうな木も伐採し、いざという時のためにすぐに避難ができる準備を整えた。子どもたちの命を守りたいという地区全体の思いが伝わった。



3 取組の成果

- 避難訓練を月1回実施したことで、児童・職員の防災意識が高まり、心と体にしみ込んでいっているのを感じる。
- 避難訓練後、毎回児童・教職員が反省し、そこから次回訓練の変更点を話し合うことでより現実に近い訓練ができている。
- 様々な学習会や防災の視点に立った授業実践などにより、思考したり判断したりする材料を増やすことができた。防災に関する知識も増えた。
- ワークショップや地域と合同の避難訓練またそれに向かう準備、防災マップ作成における地域や消防団との連携により、防災意識を学校内から地域へと広げることができた。
- 「知る→考える→行動する」の学習スパイラルは、児童の主体的な学びにつながった。また、今年度は「七月豪雨」で児童の住む近い場所での被害もあり、児童は起こりうる災害に対し、「他人事」から「我が事」としてとらえ、学習に取り組むようになってきた。
- 今年度、本校は「文部科学省指定学校防災教育実践モデル地域研究事業」の指定を受けており、防災に関する専門的な知識を持つ方々に講演や防災ワークショップを行っていただく機会は、児童にとってより深い学びにつながっている。

4 今後の課題

- 避難後の孤立に対する対応策は、まだ漠然としている。発災後希望を持って生き抜く方法を、事前復興も含めて探っていく必要がある。
- 避難所での生活等、まだ学びが浅く、どのように行動すべきなのかはっきりしていない。
- 今回の研究を愛南町内に広げていく必要がある。
- 地域で学び続ける（継続していく）システムを確立する必要がある。
- 津波後、被害を免れるであろう施設（個人倉庫等も含めて）を洗い出し、地域で情報を共有する必要がある。
- 高齢者との防災交流会は、地域の防災意識を高める上で有効であった。今後も継続して進めていきたい。
- 児童の防災意識を高めていくためには、地域の人と人との結び付きを高めることが重要であると考えられる。